

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

北海道での滞在型夏休み

今年の夏休みは、北海道で初めて訪れた、人口七、〇〇〇人程の町で過ごした。完全なる滞在型で、朝食はトマトを収穫してほおぼり、その後地域の方の種取りの手伝いをしてから、「さて今日は何をしようか」と思索する毎日だった。旅好きの私だが、小さな町で一週間以上を過ごすのは初めてだ。旅好きにもいろいろな人がいて、その場所に行ったということが大事で転々と移動しながら先を急ぐ人と、その場を味わうのが大切だと滞在時間を楽しむ人がいる。

私はというと、行ったところは増やしたいし、浸っていたい気もするということどころにも欲しいが、欲張りなのだが、今回は留まる旅に挑戦してみた。幸いなことに一日も雨が降らず、一四度〜二五度の気候は、避暑としての役割を大いに果たしてくれた。

そんな中、ある日家のインターホンが鳴り、ご近所だということを探りたてのシンジシを持ってきて下さったご夫婦がいた。鹿児島から来て、一年の半年をこちらで過ごす生活を一四年も

続けているというのだ。確かに鹿児島夏の考えるとそれは分からなくもないのだが、ご主人様は、「何でそんなに行かなきゃならぬのだ」と当初はしびしびの同行だったとか。どうやらご夫婦も、リタイヤ後は奥様の意見を尊重されているようだ。

半年も毎年北海道で過ごすとなると家の問題があるが、農家の空き家を借りているとのことだった。畑の中にボンとある家を電車の窓から見るとはあって、そこに自分が住む機会があるなどは考えたこともないのだが、実際に実行されている人がいた。鹿児島でのお宅は駅のすぐそばとのことなので、半年は「都会暮らし」、半年は「田園暮らし」を実践されているのだろう。これは地方の空き家対策につながるのでは……と勝手に考えてみたのだが、地域の方にお聞きすると、実際に住みたくなるような空き家物件はなかなか無いとのことだった。

そうは言っても、ネット上で不動産物件を検索し車で見て回った。売り地はいくつかあるのだが中古住宅

ということになると、築年数の問題など手入れ無しには難しそうな物件が多い。省エネ基準がどんどん改正されているなかで、次世代省エネ基準でも一九九九年。築三〇年以上の物件で、この北海道の冬を過ごすのはどうなのだろうか？ 暖炉がある住宅ばかりではないことを思うと、リフォーム無しには考えにくい。

地球温暖化で夏の都市部の暑さがこたえるこの頃だが、海外でのサマーバケーションのように、月単位で暮らす場所を変えられないものだろうか？ 働き方改革がうたわれてもいる中で、ネット社会では遠隔地での仕事が可能なのではないかと思う。一居住ではなく短期間でも二拠点居住の、メリハリがきいた生活の可能性を模索してみたいものだと思う。

道の駅の駐車場には日本各地からのキャンピングカーが何台も停まり、アクティブなご夫婦が夜を明かしていた。与えられた人生の中でどう良い時間を過ごせるかは、今後大事な課題だと感じている。



西田恭子のプロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。